「共有情報」に関わる言語表現の対照研究

岩　畑　貴　弘

1　はじめに

「共有（sharedness）」という考え方・概念は、「共有知識（shared knowledge）」や「共有情報（shared information）」などという用語のなかで、言語学では以前から使用されてきたものである。そして英語では、それが主題化（topicalization）や左方転移（left-dislocation）との関連、または代名詞の使用や定性（definiteness）の問題などと関連して取り沙汰されてきた。また談話と関連した研究においては、anaphoric、given、old などと名前を変えて使用されてきた歴史がある。（この歴史の簡潔な説明が Prince 1985 にある[1)]）。

最近では、「談話標識（discourse marker）」や「語用標識（pragmatic marker）」という観点から多くの表現が分析され、その説明の一端に「共有」という概念・考え方・用語が見え隠れするということにもなっている。しかし私見では、「共有」という概念が言語分析・言語学において持つ大きな可能性の割には、その注目度は低く、またその故に概念が充分整理されてこなかったという印象がある[2)]。

本論文は、上述の「語用標識」の観点から「共有」という概念を見直し、そこから言語に関するあらたな知見を得るための試みのひとつとし

てみたい。なかでも、特に日英語の対照において「共有」概念がどのようにそれぞれの言語に関わっているかに焦点を当てる。その考察の材料として、本論文においては日本語のいわゆる終助詞「ね」(ならびに他の終助詞も「ね」との関連においてとりあげる)、および英語の *you know* に注目する。そして、それぞれの言語表現は「共有情報」という概念との関連があるが、同様の談話機能を持つものではなく、ある側面においては同様であれども、別の側面においては異なったものであることを主張する[3)]。

2　日本語の終助詞「ね」

日本語において多く「終助詞」と呼ばれる一群の機能語は複数存在するが、その中でも「ね」は、その用法の多様性ならびに統一性を一見欠くように見えるその振る舞いから多くの研究者の注意を惹き、結果として膨大な研究の蓄積がある。その詳細な分析は当然ながら一論文にできることではなく、ここでは割愛せざるをえないが、後述の議論のために終助詞「ね」の使用例を一部のみ以下に挙げておく。(以下の例中の下線部の「ね」が説明の対象となっているものと理解いただきたい。)

(1)　　A：いい天気だね。
　　　B：うん、いい天気だね。

この例中において、A の発話の「ね」は、おそらくはそれに先行する「いい天気だ」という A 自身の発話の想定に関して、聞き手である B に同意・同調を要求していると思われる。

別の例を見てみよう。

(2)　A：今年の北海道は寒いらしいね。
　　B：らしいね。

この「ね」と、言い切りの形（だ）とそうでない形（らしい）とは直接関係はなく、両者とともに使用できる。言い切りの形（神尾（1990）が設定するところの「直接形」）であれば、直接形で表現されていることに対して同調を要求しているようであるし、言い切りでない形（神尾が設定するところの「間接形」）であれば、間接形で表現されている（のでおそらくは確信度が低かったり、人から聞いた情報であったりする）ことに対して、その程度の確信度のレベルで同調を求めているのである。つまり、(2) の例の場合、B が「今年の北海道は寒い」ということをおぼろげながらでも知っていれば、A は「ね」が使用できるし、使用せねばならないということである。

(3)　A：おなかがすいたね。
　　B：うん、すいたね。

このケースでは、A は B の空腹具合については推測するしかなく、その時点で青空が眼前にあるなど、「今年の北海道は寒い」というニュースが連日テレビで流れている状況より、はるかにその確信度は低い。しかしながら、この場合も問題なくネの使用が許される。実際に、場面が違えば話し手の見込みが外れる場合もある。

(4)　A：おなかがすいたね。
　　B：いや、僕は大丈夫。

同意が得られると思って発したＡの文だが、実際にはそれを達成できなかったというケースである。

次のケースは、曖昧に解釈すれば同意ということなのかもしれないが、上述のケースとは明らかに異なるケースであり、「確認」の用法と多く呼ばれるものである。

(5)　　Ａ：あなたは田中さんですね。

　　　Ｂ：はい、そうです。

この例においては、Ａが持つＢが田中さんであるという想定を確認している。その確認のための文に「ね」が用いられているわけである。実際、「ね」のかわりに「か」が用いられると確認ではなく疑問となる。

このような使用例に鑑みて終助詞「ね」を考える時、当然ながら上述の「共有」あるいは「共有情報」という概念が妥当あるいは少なくとも有用ではないかとの考えは容易に浮かぶ。しかしながら、その考えに基づく分析は、いくつかの「ね」の使用例に基づき否定されている。これら全てを挙げることは本論文の目的ではないため、そのうちの主要なひとついわゆる「自己確認のね」について簡単に見てみよう。「自己確認のね」は、蓮沼（1988）によって初めて指摘されたが、これまで扱ってきた「ね」とはかなり性質を異にするように表面上は見え、そのために多くの議論の対象となってきた。（ただし、「自己確認」という名称は金水・田窪（1998）による。）以下の例を見ていただきたい。

(6)　　Ａ：いくらですか？

　　　Ｂ：えーと、500円ですね。

(7)　A：今何時かわかりますか。
　　B：えーと、7時15分ですね。

このような例は相手に対する確認・同調というよりは、自己においての確認が強い、と金水・田窪が主張するものである。それが「自己確認」の「ね」と呼ばれる所以である。(その他、このタイプの文は先行研究においても言及・分析されている。例えば片桐1995、中川・小野1996、坂本・玉岡・松本2003など。)

この「自己確認」の「ね」のような事例もあり、むしろ一般的な「共有」という概念から「ね」の分析が離れていった印象があるが、しかし実際には、共有の定義を少し見直せば、問題なく説明可能のように思われる。

まず、「ね」は語用標識の一つであり、それが話し手と他の人（聞き手含む）の「共有情報（非占有知識・情報）であることを表す標識であり、それを表すことによってコミュニケーションの心的態度を伝達しようとするものとする。つまり真偽条件とは基本的に関係がなく、コミュニケーションの進行具合を示したり確認したりする表現であると考えることができるだろう[4)]。

言い換えると、「ね」はそれが付加される文のあらわす情報が、話し手独占の情報でなく、聞き手が独占している情報でもなく、話し手・聞き手によって「共有」されている情報であると話し手が考えていることを明示する標識である。図示すると次のようになる。

(8)

	「ね」	
話し手の情報	共有情報	聞き手の情報

当然ながら、「話し手の情報」「共有情報」「聞き手の情報」といっても互いの区分は非常に曖昧であることが予想される。

そもそも「共有情報」というものは、それが話し手と聞き手との関係においてであれば、話し手と聞き手両者に共有されている情報とすれば感覚的には了解可能であると思われるが、現実的には、話し手と他者一般との共有情報という考え方の側面も存在するようであり、別途定義が必要である。そこで、「共有情報」を以下のように定義したいと思う。

(9)「共有情報」の定義

1. 現在共有されていると話し手が考える情報
2. 共有すべき情報と話し手が考える情報

このように考えれば、まずは「ね」の用法の典型的なものの説明はつく。上述の例を再掲してみよう。

(10)　A：いい天気だね。
　　　B：うん、いい天気だね。

(11)　A：今年の北海道は寒いらしいね。
　　　B：らしいね。

これらの例においては、話し手であるAにとって、それぞれ「いい天

気である」「今年の北海道は寒いらしい」は明確に共有情報である。つまり、(10) の場合は眼前に広がる青空は当然ながらそれが聞き手の意識にもあると考えるのが妥当であることは疑いがないし、(11) においてその確信度は多少下がるかもしれないが、おそらくはニュース等で連日言われる「今年の北海道は寒い」という情報はおそらく聞き手の耳にも届いているだろうと考える、つまり共有情報であると考えるのは妥当である。

他方で、上述のような考え方は「自己確認の「ね」」もうまく説明できる。例を再掲しよう。

(12)　　A：いくらですか？
　　　　B：えーと、500 円ですね。

(13)　　A：今何時かわかりますか。
　　　　B：えーと、7 時 15 分ですね。

両者とも B が発話する際に「(品物が) 500 円である」「(時間が) 7 時 15 分である」という情報は、A は知らないという意味においては共有された情報ではないが、しかしそれらはまさに A が求めた情報であるということが肝要である。まして、例えば話し手の内面的な感情を吐露する発話ではなく、そもそも B や A が知ると知らざるとに関わらず「その品物は 500 円である」「現在の時刻は 7 時 15 分である」という情報があり、それはある意味公共性の高い情報であり、そのため共有すべき情報と言える。このように考えれば、「ね」の使用が可能なのも充分説明可能である。

細かな検討は別の機会に委ねるとして、本論文の目的である、共有性

との関わりにおいて英語との対照という見地から見ると、日本語の場合は、基本的に当該情報に関して共有されているといえる場合にそれをあらわす標識を付す、というシステムが存在するようである。しかし一方で、おそらくはその基本的な用法から派生して、共有情報でなくとも、それを目指して同様の語用標識、すなわち「ね」を付加する場合も存在するということが日本語のシステムには存在するようであることもわかる。

3　英語の you know に関して

これまでの研究において、それぞれアプローチは異なれども「共有」という概念と言語表現との関係を扱ったものが多く存在する。例えば、英語における定性（definiteness）との関係もそのひとつと言える。また、そのほかに言語表現として共有性との関連が強く示唆されるものに、you know という表現がある。これに関する研究で著名なものは Schourup（1985）による研究がある。その後は、同様だが少し角度を変えたような you know に関する研究があり、また日本人研究者による、「ね」との関連性を意識したような you know の研究も散見される。(Onodera 2002 など)

最近では Müller（2005）がこの問題を扱い、先行研究においては、you know には実に 30 近い異なる用法があるとしている（147 ページ)。一方で、Müller 自体はコーパス分析に基づき、以下の 10 程度の用法を認めている。

(14)　Lexical/content search
　　　False start/repair

Approximation

Explanation

Quotative you know

“Imagine the scene”

“See the implication”

Reference to shared knowledge

Appeal to understanding

Appeal to acknowledge that the speaker is right

Various (189 ページ)

そしてその際に以下のようなまとめをしている

(15)… On the certainty side, you know may be used to “introduce what s/he regards as incontestable mutual knowledge” or conjoint knowledge (Holmes 1986: 8). Even though Östman (1981) found that the use of you know does not necessarily mean that the hearer knows, and even though Biber et al (1999: 1077) claim that you know sometimes imparts new information, it can also be the case that the information introduced by you know is indeed known to the hearer (cf. Jucker and Smith 1998: 193). This information may either be knowledge specifically between speaker and hearer (cf. Stubbe and Holmes 1995: 69), or general knowledge (cf. Schiffrin 1987: 274).

(148–149 ページ)

最後の一文（本論文著者訳「この情報は特に話し手と聞き手間の情報で

あるか、一般情報であろう」）はまさに「ね」においての結論と類似性が高いように見える。

ただし、「ね」との最大の違いは、「ね」はある場合においてはその使用が必須であり、かつ終助詞として文の一部となるが、一方の you know は基本的にいかなる場合においても随意的であり、文の一部というよりは挿入句的な要素であることであろう。

そのような違いはあっても you know はやはり共有性というものが深くかかわっているようである。つまり、もちろん発話をするという時点で、情報を聞き手に伝え、その結果共有状態を作り出すという意味では共有性と深くかかわっているわけではあるが、you know を付加するとそれを特に促すような意味があると言えるのではないか。

まとめると：

（16）1. you know と「ね」は両者とも共有という概念と関連している。

2. 「ね」もその用法という観点から言えば、実に数多くのものが報告されている。また、それは一見「共有」とは関連のなさそうな用法も含んでいる。

このように考えれば、やはり you know と「ね」は共通性が高いと言えよう。

4　日本語の「ね」と英語の you know の共通性と異質性

共有情報のあり方というのは、人間のコミュニケーションのあり方とも大きく関連している。片桐（2005）の第３節「コミュニケーション行動における共有化」で、「複数人からなる会話相互作用においては会話

参与者の間でさまざまな協同的な現象が成立していることが知られている」として、例示がなされている。

Clark and Shaefer（1989）なども同様の点に関して研究があるが、Traum（1994）は「対話の中で話し手と聞き手の間で実現される情報の共有化を共通基盤（common ground）の形成ととらえ、共通基盤を作り上げる課程を基盤化（grounding)、そのために用いられる承認や問い返しなどの行為を基盤化行為（grounding act）と呼んでいる」(205 ページ）としている。

このような見地からすれば、「共有情報」を明示するという考え方・言語のあり方も当然ながら「基盤化」に大いに役立っているものと見ることができる。つまり、ある言語メッセージを伝えることによって「共通基盤」が形成されるが、その共通基盤そのものが強固に形成されているかどうかを確認するための表現・言語形式が存在するということになる。それが「ね」であり、you know であるということである。

「基盤化」のために、「共有」に関連した情報が文に加えられているようだ。文の真偽情報でなく、それはあくまで語用標識（pragmatic marker）ということになる。（この意味においても談話標識（discourse marker）という用語を用いるよりわかりやすい。）

このように「ね」および you know ともに共有情報と関係があるのは明らかである（普遍性）が、しかし一方でそれぞれの「標識」と「共有」の何をどう表わすかによって明らかな違いが存在する（個別性)、と考えることが可能である。

つまり、共有状態（話し手と聞き手間のコミュニケーションが円滑にいっているという状態）を作り出すという目的はもちろん同じだが、それに対するアプローチが少し異なる。

(17) 1. 日本語では、すでに共有状態が確立されているものを確認し、それを前提としてさらなる確立を図る。静的アプローチ。ただし、派生的用法として、共有状態にしたいときに用いる場合もある。

2. 英語では、現在の状態よりむしろ、話し手が共有状態にしたいと願うものに当該標識を付加する。動的アプローチ。

この区別はコミュニケーションの成立という側面から見れば、極めて合理的である。つまり、情報のやりとりと同時に、情報・認識の共有という基礎固めが当然される。そのために使用される表現・小辞である。ただし、「ね」と you know はそのやり方に多少の違いが存在する、ということを意味していると思われる。

日本語の例を見てみよう。

(18) (同じ料理を食べながら)

A：このスパゲッティ本当に美味しいね！

B：うん、本当に美味しいね。

この場合、状況から判断して「このスパゲッティは本当に美味しい」という認識を両者とも持ち合わせていると思われるが、それを前提としてさらに確認がなされると言える。

よって、次のように聞き手の意識に当該認識がないと思われる場合には「ね」が使いにくい。

(19) (唐突に)

？？今日は水曜日だね。

実際にこういう発話もなされるが、その場合には話し手が言外に「聞き手もそのことを了解しているはず」という強い示唆があり、通常聞き手は話し手が何のことを言っているのか考えねばならないという状況に陥る。

ちなみに、唐突にしかし単純に水曜日であることを確認したいならば、

(20)　今日は水曜日だよね。

と、日本語では「よ」を挟めば「ね」の使用が可能となる。この例から考えると、日本語の「よね」は英語の you know に通ずる、共有状態への動的アプローチ的な側面があるという可能性もある。

そもそもコミュニケーションにおいて話し手は聞き手と情報・知識におけるある程度の「共有状態」を作り上げたい。「ね」は、当該情報の所属箇所（話し手と聞き手とのバランスのなかで）を明示する小辞である。英語では、同様の概念は存在し、you know はそれを基に使用されているようであるが、日本語と英語との差異は日本語ではそれが文法化されていて、状況によってはその使用が必須であるのに対して、you know はあくまで挿入句であり、必ずしも必須ではないということであろう。

5　おわりに

もう少し大きな観点、コミュニケーションという観点からこの問題を捉えなおすと、話し手／両者／聞き手情報を明示的に表すということは、両者のコミュニケーションの成功・醸成をもたらすという意味で大変に

意義深い・意味のある小辞と言えるが、そもそも談話標識というのは、当該文に何らかの意味で付加すると言う性格上、必ずしも他のものと体系的に調和する必要はなく、何らかの語用論的な意味を「付加」するという役割であるので、独自の語用論的意味（pragmatic meaning）が出やすいと言えるだろう[5)]。

「共有」「共有情報」一つまり情報を共有すること一というのは、突き詰めればコミュニケーションのひとつの目的とも言え、それだけで理論ができるほどであろう。その割にはまだまだ研究が進んでいないようであり、今後の深い分析が待たれる。

注

1) 「共有知識（shared knowledge)」は類似の概念を代表させるものとしてここでは取り扱う。類似の概念とは例えば Lewis（1969）の提唱による「共通知識（common knowledge)」や Schiffer（1972）の提唱による「相互知識（mutual knowledge)」を含むものとする。

2) Discourse Marker（及びその日本語訳である「談話標識」）と、Pragmatic Marker（及びその日本語訳と言える「語用標識」、ただし「語用標識」という言い方は日本ではあまり使用されていない）という用語はほぼ同じものを意味すると思われるが、研究者によってその使用はまちまちである。これらの他には、Schourup（1985）などによる Discourse Particle、あるいは Frazer（1988）などは単純に Connective という呼び方もしている。このあたりの事情は Müller（2005: 3–4）に簡潔にまとめられているので参照いただきたい。

3) 特に「ね」の分析と関連して、いくつかの類似概念が提出されている。例えば、「同一」「同調」「共有」「共同」「融合領域」等である。岩畑 2007 において考察したように、それらは同一の概念を違った角度から見たものであると考えられる。したがって、データの説明との関連においてそれらの概念の優劣を論じることはあまり意味のないことであり、それらに触れずにここでは「共有」「共有情報」を持って当該概念を代表させるものとする。もちろん、より大きなフレームワークとの関連で言えば優劣は存在するものと思われるが、それはそのフレームワークの取捨とも関連しているため、次の段階の、あるいは将来の課題と思われる。

4) ただし、共有知識と言ってしまうといわゆる共有知識のパラドックスに陥ってしまうが、そうではなく、知識というよりむしろ「責任のあり方」「なわ張り」と関係する情報とも言え

る。つまり、相手に当該知識がある、という捉え方でなく、相手のなわ張りに入っている・責任がある、と話し手が勝手に推察する、というような言い方となる。これを表すために、共有知識（shared knowledge）でなく、共有情報（shared information）という用語を区別して用いる。

5）日本語において終助詞は方言による形態上および意味上のバリエーションが非常に豊富であると報告されているが、それも当然と思われる。

参照文献

岩畑貴弘（2007）「「共有」という概念について」『神奈川大学人文研究』第162号、神奈川大学人文学会、45–59。

片桐恭弘（1995）、「終助詞による対話調整」『月刊言語』第24巻11号、38–45、東京：大修館書店。

神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』 東京：大修館書店。

金水敏・田窪行則（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3、85–115、東京：講談社。

――― （1998）「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」堂下修司・新美康永・白井克彦・田中穂積・溝口理一郎（編）『音声による人間と機械の対話』、256–269、東京：大修館書店。

坂本勉・玉岡賀津雄・松本充右（2003）「空主語文の処理における終助詞「よ・ね」の機能に関して」、44–49、『日本言語学会第127回大会予稿集』。

定延利之・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構―心的操作標識「ええと」と「あの（ー）」―」『言語研究』第108号、74–93、日本言語学会。

田窪行則・金水敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』第3巻3号、日本認知学会、59–74。

――― （1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会（編）『文法と音声』、257–279、東京：くろしお出版。

中川浩志・小野晋（1996）「日本語の終助詞の機能　―「よ」「ね」「な」を中心として―」『自然言語処理』第3巻2号、言語処理学会、3–18。

蓮沼昭子（1988）「続日本語ワンポイントレッスン」『言語』第17巻6号、94–95、東京：大修館書店。

Biber, Douglas, Edward Finegan, Stig Johansson, Susan Conrad and Geoffrey Leech

(1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.

Clark, Herbert H. and Edward F. Schaefer (1989) Contributing to discourse. *Cognitive Science* 13, 259–294.

Frazer, Bruce (1988) Types of English discourse markers. *Acta Linguistica Hungarica* 38, 19–38.

Holmes, Janet (1986) Functions of 'you know' in women's and men's speech". *Language in Society* 15 (1), 122.

Jucker, A. H. and S. W. Smith (1998) And people just you know like 'wow': Discourse markers as negotiating strategies. In A. H. Jucker and Y. Ziv (eds.) *Discourse Markers: Descriptions and Theory*. Amsterdam / Philadelphia : John Benjamins Publishing Company, 171–201.

Lewis, David K. (1969) *Convention: A Philosophical Study*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Müller, Simone (2005) *Discourse Markers in Native and Non-native English Discourse*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Onodera, O. Noriko (2002) *Japanese Discourse Markers : Synchronic and Diachronic Discourse Analysis* (*Pragmatics and Beyond New Series*). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Ostman, Jan-Ola (1981) *You Know : A Discourse-Functional Approach*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.

Prince, Ellen (1985) Fancy syntax and 'shared knowledge', *Journal of Pragmatics* 9, 65–81.

Schourup, Lawrence. 1985 [1982]. *Common Discourse Particles in English Conversation*. New York: Garland.

Schiffer, Stephen R. (1972) *Meaning*. Oxford: Oxford University Press.

Stubbe, Maria and Janet Holmes (1995) "You know", "eh" and other "exasperating expressions": An analysis of social and stylistic variation in the use of pragmatic devices in a sample of New Zealand English. *Language and Communication* 15 (1), 63–88.

Traum, David R. (1994) *A Computational Theory of Grounding in Natural Language Conversation*. PhD thesis, Department of Computer Science, University of Rochester.